

試験の概要

小論文の試験では、これまでの総合問題BおよびⅡ「日本語の能力を問う問題」と同様の選択問題と記述問題によって、言語理解・言語表現の基礎的な能力、および思考力・判断力・表現力を多角的に評価します。

記述問題では、本文の内容を正しく理解したうえで、それをふまえた自分の考えとその理由を、200 字程度で論理的に述べる問題などが出題されます。

記述問題の出題例および解答例 ①

(R7 学校推薦型選抜 総合問題Ⅱ「日本語の能力を問う問題」より)

<https://www.fun.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2025/04/2025suisen-12.pdf>

「ハーフ」ということばを聞いて、あなたは誰の顔を思い浮かべるだろうか。やはり、容姿端麗な欧米白人系の「ハーフ」の顔だろうか。だが、日本で Instagram の女王と呼ばれる渡辺直美やアイドルグループ・アンジュルムの佐々木莉佳子、グランドスラムで優勝を果たしたテニス選手・大坂なおみ、NBA 選手となった八村塁など、いわゆる「欧米白人系」ではない「ハーフ」もすでに活躍していることが知られている。ア、もしあなたが真っ先に容姿端麗な欧米白人系という(イ) 支配的に流通する「ハーフ」の顔を思い浮かべたのであれば、それはあなたがメディアの権力に巻き込まれているからだ、といえるかもしれない。ニック・クドリー(N. Couldry)によればメディアの権力とは、人々が生きる社会的現実を規定するものだという。どうのことだろうか。

(ウ) メディアがなんらかの意図をもって社会風景を切り取り、編集や加工を加えて映し出すことで、メディアのオーディエンス(聴衆、視聴者)の「日常的な会話の中で利用可能な参照点を狭め」、いつしか人々の認識やふるまいをパターン化してしまう、そんな累積的な圧力をクドリーはメディアの権力と呼んだ(Couldry 2012=2018)。「参照点を狭める」とは、実際には多様な身体形質をもち、さまざまなルーツの「ハーフ」がいるにもかかわらず、メディア上では「容姿端麗な欧米白人系のハーフ」ばかりが映し出されるといった状況のことだ。こうした状況では、人々はまるで(エ) 同じ色眼鏡をかけて世界を見ているかのように、「ハーフとは容姿端麗で欧米白人系だ」という認識をもってしまいがちだ。そうした認識をもったまま人々がやりとりを重ねると、多様な「ハーフ」の姿がますますオ化・不可視化されながら、「ハーフとは容姿端麗で欧米白人系だ」と思ってしまいがちな社会的現実が形成されていく。すると、支配的に流通する「ハーフ」(カ) 表象を基準に比較を行いながら、当事者が望んでもいないのに一方的に「やっぱりハーフだから可愛いね／格好いいね」とほめそやされたり、反対に「ハーフなのに…」と貶(おとし)められるキ化が「当たり前」のように起こる。この(ク) 「当たり前」をつくり出す累積的な圧力こそ、メディアの権力なのだ。

ケイン樹里安 (2019). 「ハーフ」にふれる ケイン樹里安・上原健太郎 (編著) ふれる社会学 (pp. 95-102) 北樹出版 (出題のため一部改変)

問 「メディアの権力」に対し、どのように関わっていくことが重要だと考えるか。本文の内容をふまえ、あなたの考えを、理由とともに 200 字程度で述べよ。

解答例

筆者は、メディアによって狭められた参照点をもとに人々がやりとりを重ねることで、偏った見方が「当たり前」の社会的現実になっていくと述べている。私は、自分自身も情報発信者であることを自覚し、メディアから得た見方を「当たり前」として語っていないか常に点検することが重要だと考える。なぜなら、メディアの権力は情報を受け取る時だけでなく、それをもとにした人々のやりとりによっても再生産されると考えられるからである。(202 字)

記述問題の出題例および解答例 ②

(R8 総合型選抜 総合問題B「日本語の能力を問う問題」より)

https://www.fun.ac.jp/wp/wp-content/uploads/exam_sougou2026-c-ver2.pdf

AIによって私たちの教育システムが直面する最大の脅威は、宿題が破壊されたことではなく、正式な教育の後に続く(ア) 隠れたシステムとしての徒弟制度が損なわれることだ。ほとんどの専門的な労働者にとって、学校を離れて職に就くことは、実践的な教育の出発点であり、教育の終着点ではない。学校教育の後には何年にもわたる実地のトレーニングが続く。それは、組織的な研修プログラムから、夜遅くまで残業して怒った上司に些細(ささい)なことで怒鳴り散らされることまで、多岐にわたる。このようなシステムは、学校教育システムのように(イ) 中央集権的に設計されたものではないが、現場での仕事のやり方を実際に学ぶために非常に重要だ。

昔から人々は、最下層からスタートして専門技能を身につけてきた。大工の見習いや雑誌編集部のインターン、研修医などだ。これらは通常、かなり過酷な仕事だが、目的には適している。その分野でより経験豊富な専門家から学び、彼らの指導のもとで試行錯誤して初めて、素人が専門家になることができる。しかし、AIによってこれが急激に変化する可能性がある。インターンや新米弁護士が失敗して怒鳴られるのが嫌なように、彼らの上司も通常、生身の人間の感情や失敗に付き合わされるよりも、仕事が早く完了してくれたほうがいい。そのため(ウ) 上司は、大抵は高度な専門家ほどの仕事はできないが、新人研修生よりは優れていることが多いAIを使って仕事を自分でやってしまうようになる。このことが、大きな研修ギャップを生み出す恐れがある。

(中略)

AIが(エ) 基本的なタスクをますます自動化するにつれて、これと同じような研修危機が広がっていくだろう。専門家だけが、より一層能力が向上したAIの作業結果を効果的にチェックできる唯一の存在となる一方で、専門家を輩出するパイプラインが止まってしまう危険に直面している。AIの世界で役立つ人材となるには、人間として高度な専門知識を獲得することだ。幸い、教育者は専門家の育成方法についてある程度知っている。それは皮肉なことに、基本に立ち返ることを意味する。ただし、AIによってすでに革命が起こっている学習環境に適応した方法で実施しなければならない。

イーサン・モリック著、久保田敦子訳(2024)．これからのAI、正しい付き合い方と使い方 「共同知能」と共生するためのヒント KADOKAWA(出題のため一部改変)

問 「AIの世界で役立つ人材」を育てるためには、どのようなことが重要だと考えるか。本文の内容をふまえ、あなたの考えを、理由とともに200字程度で述べよ。

解答例

筆者は、AIが新人の仕事を担うと、新人が専門家の指導のもとで試行錯誤する機会が失われ、専門家の育成が途絶える危険を指摘している。私は、AIの世界で役立つ人材を育てるには、非効率で手間がかかるとしても、新人が専門家から学びながら経験を積める環境や仕組みを用意することが重要だと考える。なぜなら、AIが行った仕事を適切に評価するには、こうした経験によって得られる高度な専門知識が必要だからである。(196字)